

伝え合う とはなんだろう 私たち自身が 感じてつくる

英語を学ぶ目的は、単なる知識の習得ではなく、英語を使って何かができるようになること。編集にあたっては、ネイティブともじっくり議論を重ね、「本物の力」が身につくための教科書を目指しています。

教科書編集に際して行っている、編集部と英語教育に関わるネイティブとの英語ミーティング。よりよい表現や構成について、率直に意見交換する。

世界を舞台に生きる
子どもたちの、
心が育ち、力が身につく
言語活動を。

グローバル化する世界だからこそ、「話す・聞く・読む・書く」の言語の四つの根幹が、さらに重要になってくる。子どもたちが生きる未来を見据え、光村図書の教科書は、学習のための素材と言語活動の〈質〉にさらなる重きを置いています。

たとえば英語では、教科書の編集会議に英語教育に関わるネイティブも参加。自然な英語表現を追求することはもちろん、日本と海外の文化の違いにも配慮。ネイティブとの対話を通じて、編集部もつねに学び続けています。



この色 この臨場感を
なんとか教室に届けたい

全教科、全ページ、
教科書の見え方にこだわる光村図書。
思い描いた紙面の色を再現するための
色校正も厳しく行います。

印刷の質も、授業の一部。
だから職人魂が奮い立つ。

同じ作品であっても、不思議なことに、
作品集や図録によつて見え方は変わります。
これは、用紙の質、印刷方式、そして
印刷のベースともいえる製版技術がさ
まざまだからです。そのすべての要素に
こだわり、作品の色や質感などの再現性
を追求する、光村の教科書。

たとえば美術の「風神雷神図屏風」の
ページは、製版の技術者が、屏風を所蔵
する建仁寺へ赴き、色校正をします。作
品と対峙しながら、校正刷りと比較・確
認することで、本物の色と臨場感の再現
性を高めます。美術に限らず、教科書の
絵や写真はすべて丁寧に色校正を行い、
印刷の品質に強くこだわる。教科書の印
刷の質が、授業の質にも影響すると思っ
ているからです。

平成 24 年度版中学校用教科書の美術では、両観音
開きの構成で、4 ページ全面に印刷した「風神雷神
図屏風」が話題をよんだ。



高精細デジタル複製の屏風と校正刷りを見比べながら、
赤ペンを手に色校正のメモを入れる製版技術者。



依屋宗達による国宝、「風神雷神図屏風」を
見るために京都市の建仁寺を訪れた2名。
現在、実物は京都国立博物館寄託。